

第13回 土浦市内最古の貝塚

日本第二位の面積を誇る霞ヶ浦は、縄文時代から中世ごろまでは太平洋とつながった内湾でした。11,500年ほど前、気候の温暖化に伴い海面が上昇しはじめます。利根川下流域で最古の貝塚は利根町の花輪台貝塚で、約10,000年前にヤマトシジミの貝塚が作られています。このころ、利根町のあたりまで汽水域の干潟が形成されていたことがわかりますが、現在の霞ヶ浦周辺にはまだ貝塚がみつかりません。約8,500～7,000年前（縄文時代早期後葉）になると、石岡市三村地蔵窪貝塚や、美浦村陸平貝塚、潮来市狭間貝塚といった、霞ヶ浦沿岸各地で貝塚が作られるようになることから、霞ヶ浦が現在のように水を湛えるようになったのはこの頃と考えられます。そして、土浦市域での貝塚形成もこの頃に始まります。

霞ヶ浦を南に臨む台地上（沖宿町）に立地する宮西貝塚（旧称：沖宿貝塚）は4か所以上の地点貝塚から成り、早期後葉の地点貝塚はハイガイやマガキ主体と考えられています。発掘調査が行われていないため詳しいことはわかりませんが、現在のところ市内最古の貝塚と考えられています。桜川左岸の台地上（下坂田）に立地する下坂田塙台遺跡では、貝殻が充填された土坑（地点貝塚）が見つかりました。貝殻の組成はハイガイを主体としてマガキがそれに次ぎ、そのほかオキシジミやハマグリなども若干含まれていました。出土遺物には幅がありますがおおむね早期末葉～前期初頭と考えられ、宮西貝塚に次いで古い貝塚です。

これらの貝塚で主体となるハイガイは、水温の比較的高い内湾泥質干潟に生息する二枚貝で、今では伊勢湾以南のインド太平洋沿岸に見られます。このことから、7000年前ごろの霞ヶ浦は、水温の高い海だったことがわかります。市内最古の貝塚は、縄文海進という地質学的大事件に適応し、縄文人が海産資源を利用し始めた証拠といえます。

下坂田塙台遺跡出土資料は、7月20日まで考古資料館ホールにて展示するほか、10月から始まる企画展でも展示する予定です。



下坂田塙台遺跡 第2号土坑（地点貝塚）



下坂田塙台遺跡 第2号土坑 出土土器